今を生きる日本政治家へ

羽生千夏

■はじめに

私はこの機会に、戦争の記憶を次世代に継承しようと取り組んでいる活動家や平和学習に取り組む教育者、それらを制度的に支援する日本の政治的リーダーたちに伝えたいことがある。

現代における、戦争遺産は様々だ。言葉としての語り、資料としての「原爆の絵」[1]、モノとしての戦争遺品[2]、空間としての地下室[3]や校舎[4]。全ての起源は同じ戦争であるのにも関わらず、数え切れないほどの継承方法が存在する。だが、これらは起きた事実を示唆するものではあるが、私たち一人ひとりが主体的に感じ、戦争の記憶を自分ごととして思い出すことそれ自体ではない。なぜ、現在も依然として人間ではなくモノ中心のある意味で受動的な継承政策が優先されるのだろうか。ここでは、対話の本質を読み解きながら、戦争に対する学びを持続可能にする対策の確立を訴える。

■対話とは

現在、世界政治の場において核を所持していない国が、核所有国に対して対等に発言できているだろうか。もし核を持たないことによって発言の抑制が生じた場合、そこには恐怖や萎縮の態度が生まれる。これらに基づき「原子爆弾」は、核＝抑止力と考えられるのだ。核所有国にとっては、優勢な立場におかれるため短期的にはこの抑制により戦争を回避することは可能であろう。だが、その抑制が長期的な平和につながるとは限らない。所属大学で仲間と立ち上げた自主企画ゼミナールでは、戦争についての平和活動を持続可能にするための研究を行い、毎授業「対話」の時間が設けられている。議論とも討論とも異なる対話（dialogue）とは、参加者が対等に自己の声を響かせ、否定せずに受け止め合うことである。その場で感じたことを共有できる素晴らしさ、孤独感を和らげる対話の効果は、人々を自然と安心へ導くのである。さらに、つねに相手の立場を理解することで、自己の喪失を防ぎ、尊敬の輪が生み出されるされる。その結果、参加者の年齢差でさえも超えた空間が生まれ、自身の意見や提案が気兼ねなくできるのだ。

確かに公的な空間で自他を可視化する上では、少なからず他人と自身の比較が必要とされる。しかしドイツで育った大学生のフイセンさんは、「国境や国籍による区別は人が作ったものであって、自分は“地球の子”であるのだ」と述べる[5]。だからこそ、背景の異なる自分と他人をわけながらもどこか共有する空間＝対話が求められるのだ。世代を超えたつながりを重要視する上で、自分自身に戻る過程こそが、対話的手法のもたらす最大の効果であると考える。

---

[1] 基町高校普通科創造表現コースの生徒による作品（2024.6.29　訪問）
[2] 広島平和記念資料館（2024.6.29　訪問）
[3] レストハウス（2024.6.30　訪問）
[4] 袋町小学校平和資料館（2024.6.30　訪問）
[5] 公益財団法人　広島平和文化センター『平和文化』第216号

■「問い」を作る

現在各国に所有されている核兵器で、世界が何回破壊されるのか分からない。だが、科学者達は依然として核兵器の開発において手を休めることはない。このように技術の進歩の名の下に、多角的に考えずに成果や答えを出し続ける姿勢は、ヒトラー亡き後もユダヤ人虐殺の「仕事」に邁進する部下アイヒマンを連想させる（「戦場が厳しくなり、全資源を戦争に投入すべきときでさえ、ユダヤ人を詰め込んだ貨物列車がアウシュヴィッツへ向かった」）[6]。成果や答えを無批判に追求する姿勢は、その成果を共有できない者やその答えに賛同できない者との新たな対立を生み出す。平和構築においてここで私が提案したいのは、「答え」ではなく「問い」を共に生み出し、探求し続ける態度の大切さだ。その探求の過程で、対話の存続がなされ、平和の維持を獲得するのだ。

本年度の自主企画ゼミナールでは、広島フィールドワークの一環として、Human Diakogue Note Projectの実施に挑んだ。それは資料館などにある「対話ノート」を実際に対面で行ってみようという発案である。名もない私達が、観光客へ問いの投げかけを試みた活動はまさに、考え続ける社会への第一歩である。だが、時として感情が行動の妨げとなるため単に問いを作成するだけでは、解答者の協力を得るのは難しい。そこで問いの工夫は，参加者に敷居を低く感じさせたり、主題の奥行きの深さを感じさせる方法にもなる[7]。この相互的な過程の連鎖こそ、自身の学びの言語化であり、新たな継承方法の一つになりうる可能性を見出した。

■結論

正義を作らない、正解がない問いも承認される場が必要とされる現代だからこそ、対話し続け、探求の主体である自分自身も継承していく長期的な視野が重視される。先ほども少し触れたが、現代人には、アウシュヴィッツ強制収容所を作り出すヒトラーのような独裁者を再びこの世に生み出してはならない使命が託されていると思う。真の教養とは、過去の資料からアイデンティティを形成し、継承していく行為にこそ本質を見いだすのである。つながりは新たな価値を生み出し、やがて大きな平和へと導くのだ。ヒトラーが強制収容所で断とうとしたのが人と人のつながりであり対話なのだ。そこで対話という交流が平和学習における要となり、問いを投げかけ他人事にしない行いが必要であると主張したい。戦争に対し能動的な学びが必要とされる今、私達は問いを作るという新たな方法を確立させようとしている。どうか何者でもない、私達の生の声に耳を傾けてはくれないだろうか。

---

[6] 石田勇治（2015）『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社現代新書, 343頁

[7] 西塚孝平，佐藤智子（2021）『学習支援としての哲学対話実践の可能性-哲学カフェ「かんがえるソファ」を事例に』

参考文献

公益財団法人　広島平和文化センター『平和文化』第216号

石田勇治（2015）『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社現代新書

西塚孝平，佐藤智子（2021）『学習支援としての哲学対話実践の可能性-哲学カフェ「かんがえるソファ」を事例に』